

## “信頼性” 幻想——嘘をつく米の苦渋

【訳者注】ニセ旗 (false flag) 作戦を常套手段とする者は、最後まで嘘を通さなければならぬという、気の毒とも、滑稽とも言える、アメリカのやり方の風刺画のように読める。原題は単に The ‘Credibility’ Illusion であって「嘘をつく米の苦渋」は訳者が勝手につけた。本当を言えば、サイコパス NWO が苦しんだりするかどうかわからない。彼らは最初から、我々を騙し通せるとは思っていないだろう。大多数を占める阿呆を騙せればよいと思っただろう。彼らの特徴は民衆を愚弄することで、新聞とテレビだけがその道具だが、それもそろそろ終わりかな、とおそらく今は思っているであろう。

ただ、9・11 テロや、2014 年マレーシア旅客機撃墜事件は、false flag が見え見えであっても、シリアのアサド大統領への毒ガスの濡れ衣については、事実を知るもっと多くの警告者が大声で言う必要がある。この論文はそれを訴えている。

Robert Parry

Consortiumnews, April 14, 2016

オバマ政府は、2013 年のシリア - サリンガス事件や、2014 年の東ウクライナ旅客機撃墜事件についての主張を、たとえ証拠が動いても、一歩も譲らないことによって、その“信頼性”を守ろうとする。

イラク戦争について私が最も驚いたのは、喜んだイラク人たちがアメリカ軍を花吹雪で迎えてくれるという予測がいかに間違っていたか、また、いかに、この戦争が悪い展開をするかが読めなかったか、ではなかった。そうしたことはすべて予言可能で、実際、予言された。しかし私が予期しなかったことは、米政府が、大量破壊兵器のストックがないと認めたことだった。 <https://consortiumnews.com/2003/033003a.html>

私は、米政府は、いつもやっていることをやるだろうと予想した——その“信頼性”を守るためにウソをつき続けるだろうと。なぜなら“信頼性”とはそういうもの、権力をもつ機関や人間が、いかに自分が完全に間違っていようと、正しいというオーラを維持し続けることだからである。

そこでは、国家の安全保障の議論さえ必要になる——もし米政府が米国民と世界に対して、

プロパガンダによって、自分の行動を正当化しなければならないとしたら、前に言ったことはウソだったと簡単に認めることはできない。なぜなら、もしそんなことを言ったら、“信頼性”のすべてが失われるからである。次の時には、人民は容易くプロパガンダを信じなくなるかもしれない。彼らに尻尾をつかまれるかもしれない。

そして、それは米政府にとって問題となるだろう。米政府は、外国に対して戦争を始めるとか、何らかのカネのかかる対決をする前に、米国民の、そしてある程度は世界の、承認か、少なくとも、ごまかした合意を得ておかなければならない。

<https://consortiumnews.com/2016/04/13/the-victory-of-perception-management-2/>

したがって、ある種の病的なやり方で、その方針を貫くために、腐敗したメディアに依存してウソを守り通す方が、辻褄が合っている。そうすれば、その虚偽に向かってあえて挑戦するような者は、信用ならない者として退けることができる。



2003年3月19日、イランへの侵攻を宣告する G・W・ブッシュ大統領

だからこそ、私は、米政府がイラクには WMD（大量破壊兵器）もなく、現実的な核兵器計画もなかったと認めたときに、驚いたのである。私は、ジョージ・W・ブッシュ大統領のチームが、バグダッドの水泳プールあたりで見つかった、かなりの量の化学物質を集めて、たやすく信用するメディアの前に積み上げて、「なんとか間に合って見つかった！」と言うだろうと予想していた。

実際、米政府は、その誤った声明とか、あからさまなウソを、いかにそれが重要なものだろうと、修正することはめったにない。例えば、ベトナム戦争の口実となった「トンキン湾事件」が、ウソだったと公的に認めたことはない。

より小さなスケールでは、1983年のアメリカのグレナダ侵略を私が取材していたとき、ある出来事に遭遇したことがある。レーガン政権は、この小さなカリブ海の島が、西半球へのテロの中心地に改造されようとしているというウソを主張するために、あるかび臭い倉庫に、第一次大戦時代の役に立たないライフル銃が発見されたのを、途方もなく誇張したこと

がある。

その主張がどれほど馬鹿々々しくても、それは、見事に演じられたプロパガンダ運動の中で十分に功を奏し、アメリカの学生たちが故国へ帰ったときには、大地にキスをし、議員たちは、グレナダ政府のロシア語で書かれた契約書を振り回していた。

## 後へは引くな

我々は現在、シリアとウクライナに関して、同じような“後へは引くな”戦略が取られているのを見ている。オバマ政府のプロパガンダは、2013年のダマスカス郊外でのサリンガス攻撃や、2014年の東ウクライナでのマレーシア航空 17 便機の撃墜について、もはや効き目がなくなったことを、米情報局は知っていると言われているが、これらの物語は引っ込みも修正もされないだろう。

そうすること——バシヤール・アル・アサド大統領の軍がサリン攻撃をやったのでもなく、ロシア政府が MH17 悲劇の背後にいたのでもないと認めること——は、シリアの反乱軍に武器を送ったり、モスクワに対して新しい冷戦を始めたりするのを、正当化するのに役に立っていたプロパガンダ物語を、ぶち壊すことになるであろう。

もしアメリカ国民や世界の民衆が、このような敏感なトピックについて誤導されていたと知ったら——そして本当の犯罪者たちが、アメリカの援助を得ていたかもしれないとわかたら——それは米政府の“信頼性”を打ち砕き、その将来計画を断絶せざるをえないであろう。

したがって、アサドが 2013 年 8 月 21 日に、化学兵器の使用を禁ずるオバマ大統領の“レッドライン”を、踏み越えなかったという証拠を積み上げることは、何がなんでも妨害するか、忘れ去らねばならない。

そのような認識の食い違いの古典的な例として、The Atlantic 誌の Jeffrey Goldberg が最近、発表した論文がある——米国家情報局長官の James Clapper は、オバマに対し、米情報局はアサドの犯罪について、確かな証拠を何一つもっていないと話した。しかしゴールドバーグは、オバマの外交政策に関するこの長い論文を更に書き進め、あたかもクラッパーの警告がなかったかのように、アサドが本当にやったかのように書いている。

<https://consortiumnews.com/2016/03/24/obamas-foreign-policy-self-enslavement/>

それ以来、主要なアメリカのコラムニストが、ゴールドバーグ論文について書くとき、クラ

ッパーの明かしたことを全く無視している。最初は、[Consortiumnews.com](http://Consortiumnews.com) を含めたいくつかの独立ウェブサイト、クラッパー長官の報告を確認する傾向があり、調査記者 **Seymour Hersh** は、サリンを撒いたのは、トルコ情報局に手引きされた“イスラム過激派”の可能性が高いと報告した。しかし、“アサドはそれをやらなかった”という報告は、ほとんどどこでも無視されるようになり、時たま嘲笑のタネになるだけだった。

<https://consortiumnews.com/2016/04/07/a-media-unmoored-from-facts/>

<https://consortiumnews.com/2015/09/16/was-turkey-behind-syria-sarin-attack-2/>

コラムニストや、公的なワシントンのインサイダー仲間にとって問題は、いわば重要な人々のすべてが、アサドは、サリン攻撃によってオバマの“レッドライン”を超えたと、すでに宣言していることである。そこで、彼らがここで、またもや間違っていたと認めたならば、彼らの「信頼性」はどうなるだろうか？ というのも、彼らの多くは、イラクの大量破壊兵器について間違っていたことが、有名になっているからである。

その上、これら“重要な人々”に、彼らの間違いや悪事を認めるように、誰が強制できるだろうか？ サリンガス攻撃への報復として対シリア戦争を始めた、国務長官ジョン・ケリーが、アサドの犯罪を「知っている」と繰り返し主張しているのに、それを撤回することなど考えられるだろうか？ そんなことをしたら彼の“信頼性”はどうなるだろう？

ケリーはまた、2014年7月17日のMH17便機撃墜について、ロシアに指をさす者の先頭に立った。彼は、298人を殺したウクライナ東部での悲劇のたった3日後に、日曜TVショーにさっそく出演して、これはモスクワとロシア民族反政府軍がやったことだと説明した。

その同じころに、米情報アナリストたちからの報告によって、ウクライナ軍の一部がやったことが、彼らにはすでに明らかになっていた。しかし、これら罪のない人々の殺戮を、ロシア大統領プーチンの首に懸けるという誘惑はあまりにも強かった。しかもそれは、ヨーロッパを対ロシア経済制裁に参加させ、米政府が高価な新しい冷戦を起こすための、プロパガンダに役立つものだった。

### Going Dutch（割り勘でいく、オランダにも責任を取らせる？）

しかし、これらアメリカのプロパガンダの欲求は、オランダ政府を難しい立場に立たせた。なぜなら彼らは、アムステルダムを出発し、多くのオランダ市民を乗せてクアラルンプールへ向かっていた飛行機の撃墜を、調査するチームを率いていたからである。オランダの問題の一つは、オランダ情報局が、ウクライナ東部で、33,000フィートの高度の民間機を撃ち落とせた、その型のBuk（発射台）や対空ミサイルは、ウクライナ軍に所属するだけだった

ことを確認したことだった。(ロシアには、すでにその型は存在しなかった。)

<https://consortiumnews.com/2016/03/16/the-ever-curiouser-mh-17-case/>



クイン・シャンズマン、米 - オランダ両国籍をもち、2014年7月17日、マレーシア航空 MH17 に乗っていて殺された。

最近、オバマ政府はまた、この撃墜によって死んだ唯一の米市民 **Quinne Schansman** の父 **Thomas Schansman** からの手紙にどう答えるべきか決定しなければならなくなった。2016年1月5日付の手紙で、シャンズマンはケリー長官に、ミサイルが発射された場所を示すものとされ、ケリーが2014年夏に持っていると言った、レーダーその他の証拠を見せてほしいと言った。これは、まだオランダ調査団が確認していない基本的な事実だった。

<https://consortiumnews.com/2016/03/25/kerry-balks-at-supplying-mh-17-data/>

<https://consortiumnews.com/wpcontent/uploads/2016/01/SchansmanMH17LettertoKerry.pdf>

MH17 事件の多くの謎の一つは、撃墜から3日もたたないうちに、ケリーが、米政府はミサイル発射についての正確な情報を持っていると言ったのに、オランダ調査団は、その後2年近くたっても、その点が割り出せないでいることである。

2014年7月20日、ケリーはNBCの番組 **Meet the Press** に現れ、こう宣言した——「我々はこの発射の映像を確認している。我々はその弾道がわかっている。それがどこから発射されたのか、またそのタイミングもわかっている。そしてそれは、正確にこの航空機がレーダーから消えた時刻だった。」

<http://www.nbcnews.com/meet-the-press/meet-press-transcript-july-20-2014-n160611>

2014年8月12日のあるニュースでも、ケリーは同じ主張をした——「我々は発射の様子を見た。我々はその弾道を見た。我々は命中するのを見た。我々はこの飛行機がレーダーのスクリーンから消えるのを見た。したがって、それがどこから来たものか、これらの兵器がどこから来ているのか知っている。」

何か月かが過ぎ、撃墜から一周忌が過ぎ去り、昨年10月のオランダ安全理事会による未完

結の報告の後で、トマス・シャンズマンはついに、1月5日付の手紙によって、直接ケリーに接触することにした。その後、何週間も何か月もたって、やっとシャンズマンは3月24日に、ケリーの返事を受け取った。ただこの手紙は、奇妙なことに3月7日付になっていた。<https://consortiumnews.com/wp-content/uploads/2016/03/kerrylettermh17.pdf>

この手紙には、ケリーは前の通りの物語に固執するだけで、新しい情報はなかった。最近、私が聞いたところでは、この手紙の配達が遅れたのはおそらく、オバマ政府の内部で、たとえばそれがロシアとロシア民族反政府軍の疑いを晴らすことになり、ウクライナ軍のならず者か、訓練されていない部隊に罪を負わせることになっても、MH17について思い切って白状すべきかどうかの、議論が行われていたのではないかということだった。

しかし彼らは立場を変えないことにしたのだ、とこのソースは言い、そうしないと、「物語が逆転することになり」アメリカに援助されたウクライナ政府を被告席に立たせて、ロシアに対して稼いだプロパガンダの有利な立場を、いくらか失うことになるだろう、と説明した。

その上、もし米政府が、このようなシニカル（冷笑的）なプロパガンダのゲームを遊んだことを認めるなら、それは、現実の犯罪者に、罪を逃れ痕跡を消すための、2年近い時間を与えることによって、正義に悖る破廉恥漢ということになり、ワシントンの“信頼性”は大きく失われるだろう。

おそらくは、反ロシア熱を覚まさないようにしておいて、オランダ政府には、調査の結果をNATO 同盟の必要に合わせるように圧力をかけるのが、地政学的に賢明なことだったのだろう。結局、それがアメリカ政府の常套手段である。それがまた、あの時、イラクが大量破壊兵器をもっていないことについて、真実が語られたことに、私がひどく驚いた理由でもある。